

(3) 呼吸器科

特色

(a) 小児呼吸器専門の診療科

国内で小児呼吸器専門の診療科を有する医療機関は非常に少ない。当科を含めた私達のグループ以外には、おそらく2-3カ所しかないのが現状である。したがって、都内や近県はもとより、遠方からも小児呼吸器疾患に関するさまざまな相談や診療の依頼が寄せられてくる。私達はこれまでに積み重ねてきた臨床経験と専門的な検査をもとに、いつも正確な診断と的確な治療が行えるよう努めている。

(b) 豊富な臨床経験

当科は、当センターの前身である国立小児病院時代の臨床経験をそのまま受け継いでいる。したがって、これまでに蓄積された疾患や症例はかなりの数に上る。稀な疾患や所見、難治例に遭遇した場合には、その蓄積を多に活用している。

(c) 小児気管支内視鏡検査

小児気管支内視鏡検査はどこでも行えるものではない。私達はこれまでに数多くの気管支鏡検査を安全に実施し、それぞれに有用な所見を得てきた。今後もさらに安全で的確に行えるよう努めている。

診療活動、研究活動

(a) 総括

初年度としては比較的順調であった。当センターでは新たに総合診療部体制がスタートした。その影響で、当科の扱う疾患や症例数はどのくらい減少するのかまったくの未知数であったが、結果的にみると国立小児病院時代とほぼ同じくらいの状況であった。

開院後しばらくは新患が少なかったが、後半になって徐々に増加した。当センターの存在がインターネットなどを通じて徐々に広く知られるようになったこと、他の医療機関からの紹介が増加したこと、総合診療部をはじめとして他科との連携が密になったこと、などの理由が考えられる。同時に診療圏も以前より少し広域になった印象がある。

疾患の種類は多岐に渡っていた。しかし、外来診療で重要視していた遷延性咳嗽や反復性気道感染症の症例数はあまり多くなかった。入院診療では以前より重症度の高い症例が増加したように感じた。各種画像、内視鏡、モニターなどの検査は、関係各所のご協力でほとんど順調に行えた。

(b) 外来

診察日は原則として月曜午前（宮川）、水曜午前（川崎）、金曜午前・午後（川崎）とした。しかし、設定日、設定時間以外でも、たとえば学校や他科の診察日などの都合によって、担当医さえ良ければ適宜診察を行った。本年度後半には水曜で定数を上回る日が多くみられた。

新患では、紹介は比較的順調、逆に紹介以外は少ない印象であった。主訴としては、国立小児病院時代と同様に喘鳴、遷延性咳嗽、反復性気道感染症が多かった。セカンドオピニオンを求めて受診される症例は増加した。小児結核に関する依頼は非常に少なかった。

(c) 入院

本年度入院患者の疾患名（一部症状名）はおおよそ以下の通りであった。これを国立小児病院時代と比較すると、疾患の種類ではグループ症候群や周産期異常による慢性肺疾患がなくなり、症例数では急性呼吸器感染症が減少した。これらは総合診療部体制の影響と思われた。一方、嚢胞性肺疾患と気道異物の症例数は増加した。理由は不明である。

月別の入院数では、10月から予想以上に増加し、12月にはかなりのオーバーワークになってしまった。長期入院例に加え、慢性疾患患者の感染症合併による症状増悪が原因と思われた。この点に関しては、総合診療部との連携が必要と思われた。

症例の重症度は、具体的な数字として示しにくいですが、全体として以前より高くなった印象があり、結果的に入院日数が長期間になってしまう症例が増加した。当センターの性格を考えれば当然のことかもしれない。

A．急性疾患

1. 感染症

気管支炎、細気管支炎、肺炎、膿胸、百日咳

2. 非感染症

気道異物、鑄型気管支炎

B．慢性・遷延性疾患

1. 上気道疾患

上気道狭窄（喉頭軟化症を含む）、嚥下異常（吸引性肺炎を含む）

2. 下気道疾患

気管狭窄、気管軟化症、気管支狭窄、気管支閉鎖、片肺欠損、肺低形成（scimitar 症候群を含む）

副鼻腔気管支症候群、慢性気管支炎、気管支拡張症、反復性肺炎、遷延性無気肺

気管支喘息、閉塞性細気管支炎（Swyer-James 症候群を含む）

嚢胞性肺疾患（肺分画症、CCAM を含む）、特発性間質性肺炎、過敏性肺炎

3. その他

睡眠時無呼吸、胸廓形成異常、縦隔腫瘍、肺内シャント

(d) 内視鏡検査

開院以後の13カ月間で、喉頭ファイバースコープを88件、気管支ファイバースコープを69件行った。全例で重篤な副反応はみられなかった。

(e) カンファレンス

毎週木曜日午後7時から放射線科の協力を得てカンファレンスを行った。内容は症例検討が中心で、文献的な最近の話題などの紹介も行った。オープン形式とし、院外からの参加者も受け入れた。

(f) 研究活動

毎年の目標を設定しているわけではないが、新たな症例を経験する度に以前からの症例と比較しながら臨床研究を行っている。本年度の研究活動で印象的だった項目をいくつか紹介する。

- ・ 気管支喘息と副鼻腔気管支炎：最近では容易に気管支喘息と診断されたり、その管理としてステロイド吸入を指導される症例が増加する傾向にある。しかし、それらの中には気道感染症の治療を主体にするだけで、十分に管理できる症例も少なくない。
- ・ 嚢胞性肺疾患—とくに先天性嚢胞性腺腫様奇形（CCAM）と気管支閉鎖と感染後肺嚢胞の違い：おそらく一般的にはCCAMと診断される可能性の高い肺嚢胞症を詳細に検討してみると、実は気管支閉鎖であったということを以前からたびたび経験してきた。それではその気管支閉鎖は先天的なのか後天的なのかという問題である。最近の知見から、感染による後天的のものが多いのではないかと考えている。
- ・ 百日咳：予防接種済みの小児でも百日咳に罹患することがあるという認識を新たにした。血清を用いた診断法としては、従来からの凝集素価よりもEIA法の方が優れていた。